

「無くてならぬ唯一つのもの」

——Unum Necessarium (The One Thing Necessary)——

学 長 安 酸 敏 眞

皆さまご卒業ならびにご修了おめでとうございます。新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、三年たった今でも収束していませんが、ようやく「ウイズコロナ」の局面に入りつつあります。

さて、現代は将来の予測が困難な時代であり、一部の識者の間では「VUCA」の時代と呼ばれています。VUCAとは Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を組み合わせたものです。たしかに少子化、高齢化、グローバル化の進展、格差の拡大と固定化、わが国の国際的地位の低下、地球温暖化、大規模災害、新型コロナウイルス感染症のパンデミック、ロシアのウクライナ侵攻による国際情勢の不安定化など、複雑な要因が幾重にも絡まりあって、まさに一寸先は闇のような状態です。こういう時代をどう生きるか、それがわたしたちに問われています。

文部科学省は来年度からスタートする「第4期教育振興基本計画」において、かかる時代に対処できる教育目標を策定しようとしています。その素案には、①「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」、②「誰一人取り残さず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」、③「地域や家庭で共に学び支えあう社会の実現に向けた教育の推進」、④「教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の推進」、⑤「計画の実効性確保のための基盤整備・対話」といった5つの柱が打ち出され、それを実現するための16もの教育政策と目標が列記されています。

それを読むと取り組むべき課題があまりに多く、氣力が萎えてしまいそうです。「ウェルビーイング」なる語が頻出し、DXに対処できる、文理融合の専門知識を有する、グローバル人材の育成が重要だと言われているのを読むと、たしかにそうだと頷く反面、取り組むべき課題のオンパレードに、教育の根幹を見失いそうになりました。

そうしたこともあって、「近代教育学の祖」と称されるコメニウス(Joan Amos Comenius, 1592-1670)の *Unum Necessarium* という著作を読みました。コメニウスは、ボヘミア(現在のチェコ)出身の教育改革者で、児童の直観的理解のために豊富な図解をとり入れた、画期的な教科書『世界図解』を書いたことでも有名です。その彼が1668年(死の2年前)に、一種の遺言として、耳目を惹く表題の書物を書きました。ラテン語で執筆されたこの書物は、ボヘミア同胞教団の信仰に貫かれた深い敬虔性を湛えています。自らの死が間近に迫っていることを予感しながら、コメニウスは自分の生と生一般について深く思いを馳せ、人生において何が必要かを問い、それは唯一つのものだと宣言します。

Unum Necessariumというラテン語は、英語では The One Thing Necessaryというほどの意味で、日本語では「無くてならぬ唯一つのもの」と訳されています。完全な文章にして unum est necessariumとなると、「唯一つのものが必要である／必要なものは唯一つである」という意味になります。この言葉は新約聖書(ルカ10:41-42)に由来しています。あるときイエスはマルタ

とマリヤという姉妹の家に招かれます。姉のマルタはイエスと弟子たちをもてなすために忙しく立ち振る舞っていますが、妹のマリヤはイエスのそばにじっと座って、彼の話に聴き入っています。妹にも家事を手伝って欲しいマルタが、手伝うように言って欲しいとイエスに頼むと、彼は「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである……」（ルカ10:41-42）と答えます。

これをどう解釈するか、古来さまざまな説がありますが、ここでは省きます。いずれにせよ、コメニウスは聖書のこの箇所に基づき、人間にとって何が本当に必要かを読者に問うたのです。実際、わたしたちが幸福な人生を送るためには、さまざまなものが必要になります。皆さんがいま手にされた学位記・卒業証書も、就職するために必要なライセンスの一つです。その他に、健康もお金も人脈も友人も良きパートナーも必要でしょう。そうしたものを数え上げたらキリがありません。にもかかわらず、コメニウスは「無くてならぬものは唯一つ」と言うのです。では、その「無くてならぬもの」とは何でしょうか。著者の答えはここでは伏せておきます。一人ひとりが自分の問題として考えて欲しいからです。

さて、ごく最近、沢木耕太郎の『天路の旅人』（新潮社、2022年）を読んでいてハッといたしました。この作品は第二次世界大戦末期、中国大陸奥深くまで「密偵」として潜入した西川一三という人の、八年間にわたる苦難の旅を描いた、長編のノンフィクション作品ですが、あるくだりで作者は概ね次のように記しています。托鉢では、多くのものを喜捨してもらう必要はない。その日一日食べるものがあればいい。貰いすぎると、背中のウールグ〔背負子〕が重くなり、前に向かって歩むのがつらくなる。ひょっとするとこのことは、托鉢においてのみならず、生きていく上でも大事なことなのかもしれない。

托鉢とは、修行僧が鉢を持って家々を回って、米や銭などのほどこしを受けることですが、西川はチベット仏教の蒙古人巡礼僧になりすまして、乞食のような托鉢生活をしながら、中国大陸の奥地からヒマラヤを越えてインドまで、まさに人間の限界を超えた巡礼の旅を続けました。その西川が托鉢生活の中で思ったのは、モノは最小限でよい、欲張って持ちすぎると重荷になり、歩くこと自体がつらくなる、人生も同様ではないか、ということです。

今の時代はたしかに将来の予測が困難な時代ですが、同時に過剰な欲望の時代でもあります。「欲望の資本主義」が口吻に上る所以です。しかし度を越した物質的欲望を追求せず、むしろ「自分を空しくすること」に努め、またあらゆる生き物の相互依存性を認め、自発的に他者に場所を与える生き方をすれば、困ったときも必ず救いの手が差し伸べられるものです。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの3年間で、わたしたちが再認識したことは、人間は「息」という贈り物^{ギフト}を与えられて生きている存在だということです。息も地球環境も人間が生きる上で不可欠なものです。生かされていることに感謝しつつ、各自が精一杯その本分を発揮して、心豊かな人生を歩まれることを祈念して、学長の式辞といたします。